

美術館のカフェデッキでは、週末ごとにワゴン販売を行っています。夏の時期、ポニョの水鉄砲やマッククロスケの紙風船など、子どもたちが楽しく遊べるグッズを集めたワゴンを館内に置いていましたが、新型コロナウイルス感染が広がる中、館内で人が集まるのが難しくなり、それならば、賑やかに楽しめる場所を外に作ろう、と始まったのがカフェデッキの週末ワゴンです。

公園で遊べる縄跳びやドッチビーなどのオリジナルグッズの他に、ラムネやコーヒーといった飲み物や食べ物も用意しました。一番人気は「ドングリカステラ」。お祭りの屋台で売っているベビーカステラは、みなさんよくご存知だと思いますが、美術館で販売しているのは「どんぐり」の形をしたオリジナルのベビーカステラです。

館内からはもちろんですが、井の頭公園側からでもご利用いただくことができます。休日限定のワゴン販売。開店しているときは幟を立てていますので、幟を目印にぜひお立ち寄りください。



季刊トリホークス 2022年 | 67号

発行日……2022年5月28日 | 発行人……中島清文

発行所……徳間記念アニメーション文化財団

東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館

編集……石光紀子 鈴木智子 | デザイン……川島弘世

印刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

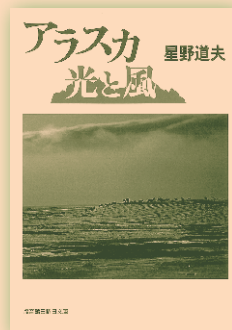
トリホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トリホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にいただけたら嬉しいです。

アラスカ 光と風

この本には、写真家・星野道夫さんがアラスカに惹かれ、初めて訪れた時のことから、定住者としてアラスカに根を下ろしてからのおおよそ20年間のことが書かれています。18歳だった頃、説明のつかない恋心のようなものだったのか、北方の自然への興味がどうしても募っていたという星野さんは、アラスカ北極圏にある小さなエスキモーの村の写真に魅了されます。こんな荒涼とした世界にどうして人間が生活を営めるのか。どうしてもここに行ってみたい。そう思った星野さんは、誰も知り合いのいないエスキモーの村へ手紙を書いたのです。「仕事はなんでもしますので、どこかの家においてもらえないでしょうか。」半年が過ぎたある春の日、郵便受けに1通の外国郵便が入っていました。「夏に来るとよいでしょう。」漠然とした憧れが、手の中に入った瞬間でした。

まだ自分のすべきことが何かわからない。何が好きで何に力を注いでいいのかわからない。そんな時、自分も闇雲に本を読み漁ったり、興味の幅を広げるために様々なものを見ようと必死でした。そんなエネルギーを星野さんは純粋に持ち続け、その無鉄砲とも言える行動のおかげで、アラスカに定住するまでに至るのです。

形は違えど、世界が開けていく時の人生の不思議さを、自分の出来事と重ね合わせて読むことができました。また、星野さんのように、違う世界で生きている人々の生活を見たい、自分がこれまで生きてきた世界観を崩してくれる何かを見つけないかと思っている方に、ご紹介したい一冊です。



アラスカ 光と風

著・写真……星野道夫
福音館書店 1,650円



松永美穂

Miho Matsunaga

本との出会い、 そして翻訳へ

ドイツ文学者であり、翻訳家でもある松永美穂さんに本を紹介していただきました。『言葉の色彩と魔法』が出版された際、松永さんのお話を聞く機会がありました。作者であるシャミさんとのやり取り、挿絵や翻訳のことなどいろいろな話を伺い、今度は松永さん自身がおもしろいと思った本を教えてもらいたいと思い、今回お願いした次第です。選ばれた本は『サザエさん』から『二十四の瞳』まで幅広く、松永さんの本棚を少しのぞかせていただきました。

* * * * *

子ども時代を過ごした家には日当たりのいい廊下があり、その端っこに子ども向けの本を入れた本棚がありました。座布団を敷いて廊下に寝ころがりながら、本を読みふけていたことを思い出します。母が福音館書店の「こどものとも」絵本シリーズを購読してくれていましたし、父や祖母がいろいろな本を買ってくれました。小学2年生のとき、「なかなか読み終わらない本がほしい」というわたしのリクエストに応じて、祖母が誕生日にバーネットの『小公子／小公女』をプレゼントしてくれました。河出書房の「少年少女世界の文学」シリーズ第9巻。いわさきちひろのカラーの挿絵が入った2段組、400ページ以上の本で、谷川俊太郎の解説付きという、ぜいたくな本です。しかも訳者は川端康成！ 子どものときはそのことに気づきませんでした。大人になって気づいたときに大変驚き、本当に川端康成が翻訳したんだろうか？ と、あれこれ推理しました。川端康成は河出書房より前に他の出版社から、共訳で『小公女』を出しており、この2つの翻訳にはそれほど大きな違いはないことから、川端康成に訳を提供したのはこのときの共訳者ではないか？ というのが、わたしの推測です。

『小公女』の物語にはすっかりハマってしまい、家の2階に子ども部屋をもらっていたわたしは、

屋根裏部屋に住むセーラになった気分、屋根伝いに隣の家からインド人が品物を運んできてくれる場面を想像したりしていました。頭がよく、気品があり、誰にでもやさしいセーラが、最後に父の友人に発見されて遺産を相続し、自分を冷遇した寄宿学校のミンチン先生を見返す結末は、胸がすく思いがしました。

小学生のときには、「エルマーのぼうけん」シリーズをはじめ、「赤毛のアン」や「シャーロック・ホームズ」「シートン動物記」など、翻訳ものをたくさん読みました。中学生のときには、父の書斎にあった筑摩書房の「世界文学大系」を読破しようと挑戦しました。そんなふうに関国の文学に親しんでいたのも、大学でも外国文学（ドイツ文学）を専攻し、未邦訳の作品を日本で翻訳紹介することに憧れを感じるようになりました。とはいえ、どうしたら翻訳家になれるのか、自分ではまるでわからなかったのですが、ドイツに留学したときにお世話になった先生の本を日本の出版社に持ち込んだところ、翻訳できることになりました。その後、お話をいただいたり、自分で持ち込んだりしながら、これまでに50冊近い本を訳してきました。

翻訳は、わたしをいろいろなところに連れていってくれたなあ……と思っています。著者に会い

にいたり、物語の舞台になった場所を訪ねたり。たとえば12年前には迫害を避けるために徒歩でカルパチア山脈を越えて逃げようとするユダヤ人の女の子の話（ミリヤム・プレスラー『マルカの長い旅』徳間書店）を翻訳したのですが、その舞台となったウクライナの村が実在することを知り、訪ねてみました。ちょうどいま、ロシアの軍事侵攻のニュースでしばしば耳にする地名「リビウ」。わたしが訪ねた村は、そのリビウの近くにありました。あのときに列車を乗り降りした駅が現在は避難民で溢れている状況に、心が痛みます。

著者との印象的な出会いとしては、シリア出身のドイツ語作家、ラフィク・シャミさんとのランチのエピソードがあります。シャミさんとは2004年と2019年に、フランクフルトのブックフェア会場でお会いしました。わたしはシャミさんの本を4冊訳しましたが、2019年はちょうど『言葉の色彩と魔法』（西村書店）が出版されたところでした。会場で日本語版を見たシャミさんご夫妻はとても喜んでくださり、その本を掲げながら一緒に記念撮影。シャミさんの妻のロート・レーブさんは画家で、しばしばシャミさんの本の表紙や挿絵を描いています。お2人が招待して下さったランチの席で、わたしはシャミさんに、「本当にもうシリアには戻れないのですか?」と訊いてしまいました。シャミさんは1971年に政治的理由でシリアを出国して以来、一度も帰国していないのです。シャミさんは即座に首に手を当てて、「戻ったら殺される」と言いました。シャミさん

の『人形つかいマリオのお話』（徳間書店）は、人形芝居のあやつり人形たちが、反乱を起こす話です。自由がなく、人々が監視下におかれているシリアに想いを馳せ、自分の意見をはっきりと表明する若者たちに共感して書かれた作品です。そうした背景を知らなくてもおもしろく読めるのですが、知ったうえで読んでいただくと、さらにいろいろなものが見えてくると思います。

翻訳は時間がかかる作業で難しいこともいろいろありますが、物語を何度も読み返し味わうことができるという意味では、楽しい作業でもあります。一冊訳し終わるとホッとしますが、すぐにまた次の本を訳したくなるわたしは、完全に翻訳中毒です。いま大学でも「翻訳・批評ゼミ」をやっており、学生たちと絵本を訳したりしています。機械翻訳も発展しつつありますが、絵本や文学作品の翻訳は、まだまだ機械には任せられない! と思いつつ、がんばっています。

まつなが みほ

1958年愛知県生まれ。早稲田大学文学学術院教授。専門はドイツ語圏の現代文学・翻訳論・ジェンダー論。著書に『誤解でございます』（清流出版）、訳書に『朗読者』（新潮社）『毎日出版文化賞特別賞』、『夜の語り部』『ナミコとささやき声』『言葉の色彩と魔法』、絵本の訳書に『ヨハンナの電車のたび』（日本絵本賞翻訳絵本賞）（以上、西村書店）がある。

トライ
ホークス
の本

夜の語り部
著者…ラフィク・シャミ
訳…松永美穂
西村書店
品切重版未定



[..... 夢中になって読んだ本]



1



2



3



4



5

①小公女* 著者…フランシス・ホジソン・バーネット 訳…脇 明子 岩波少年文庫 968円

②いはいやえん 作…中川李枝子 絵…大村百合子 福音館書店 1,430円

③エルマーのぼうけん 作…ルース・スタイルス・ガネット 絵…ルース・クリスマン・ガネット 訳…わたなべしげお 福音館書店 1,320円

④二十四の瞳* 著者…壺井 栄 岩波文庫 770円

⑤サザエさん 第一巻* 著者…長谷川町子 朝日新聞出版 880円 ◆サザエさん全六十八巻

*印は、松永さんが
選ばれたタイトルを元に、
現在出版されている書籍を
掲載しました。



「未来少年コナン」展 始まる!

5月28日(土)から新しい企画展示「未来少年コナン」展—漫画映画の魅力にせまる!—が始まりました。「未来少年コナン」は、宮崎駿監督の初監督作品であり、1978年にNHK総合で放送された全26話のテレビアニメーションです。

スタジオジブリや宮崎駿監督作品といえば「風の谷のナウシカ」からはじまる長編アニメーションを思い浮かべる方が多いのではないかと思います。宮崎監督が東映動画に入社したのは1963年、「風の谷のナウシカ」の公開が1984年、ジブリ以前の約20年間に宮崎監督が制作に関わったアニメーションは、テレビアニメーションも含めてかなりの数になります。「パンダコパンダ」(1972)や「アルプスの少女ハイジ」(1974)など、タイトルを聞けばご存知の作品も多いのではないのでしょうか。その中で、初めて監督として制作したのが「未来少年コナン」でした。



開催期間

2022年5月28日(土)~2023年5月(予定)

今回の展示は「いつか『未来少年コナン』を取り上げたい」と展示チームがずっと温めていたものが実現しました。「コナン」の持つ魅力はいくつもあります。「漫画映画」がひとつのキーワードだと思います。「漫画映画は、何よりも心を解きほぐしてくれて、愉快になったり、すがすがしい気持ちにしてくれるもの。」これは宮崎監督の言葉ですが、展示では、その「漫画映画」の魅力をストーリーや登場する機械類、創作過程で描かれた設定資料やイメージボードなどを用いて紐解いていきます。

架空の世界ではあるけれど、その世界をリアルに感じてもらうためには、登場人物の行動にもリアリティがなければならぬ。そのためには、物語の舞台も取り巻いている環境にもリアルさが必要です。人びとが暮らす工業都市やあらゆる乗り物や装置には詳細な設定が作られており、展示では、その設定をもとに物語の舞台となった「のこされ島」や「インダストリア」、そして「ロボノイド」の立体模型を作りました。動きに注目してもらいたい場面はモニタを用意しています。普通の人間ではできないぐらいの速さで走ったり、飛び降りたり、コナンたちがいきいきと動き、活躍する舞台をいろいろな角度からご覧いただけると思います。

美術館では「未来少年コナン」以外にも、ジブリ以前の作品を展示で取り上げたことがあります。2003年に開催した企画展示「アルプスの少女ハイジ展~その作り手たちの仕事~」や、2014年のギャラリー展示「トライホークスの本棚から『長くつ下のピッピ』展」などです。『長くつ下のピッピ』(岩波書店)は、1971年に企画検討されたものの映像化は実現しませんでした。当時の覚書、イメージボードなどの資料が『幻の『長くつ下のピッピ』』(岩波書店)に収められています。ハイジ展パンフレットは販売終了していますが、図書館で閲覧することは可能ですので、どんな展示だったか興味がある方はぜひ図書館へいらしてください。

最後に「未来少年コナン」の関連書籍の中から『ロマンアルバム 未来少年コナン』をご紹介します。「ロマンアルバム」シリーズは、場面スチル、キャラクター設定、制作者のインタビューなど、制作過程の資料が豊富な一冊です。この本では、基本設計資料に宮崎監督のコメントがついており、監督が作りたかったもの、めざしたものに触れることができます。



ロマンアルバム
未来少年コナン
徳間書店 2,750円